

胃腸とストレスの深い関係

栄養と料理

現代を
健康に
生きる

おかげさまで
80周年

2015
March

3

胃腸の悩み別 朝昼夕 食事ガイド

くり返す
下痢と便秘、
胃痛、
膨満感…

「ストレスと腸」のエキスパート

松枝 啓さんの
赤ひげ往診日記

おなかにやさしい人間関係のコツ
ストレスをためない
対話のキーワード

和食を知るシリーズ

全国津々浦々おいしいもの自慢!
郷土のすし百科

だしの味わいと季節の彩り
春を呼ぶお椀

虫、髪の毛、ガラス片…

食品への異物混入、意外な事実とは

●松永和紀

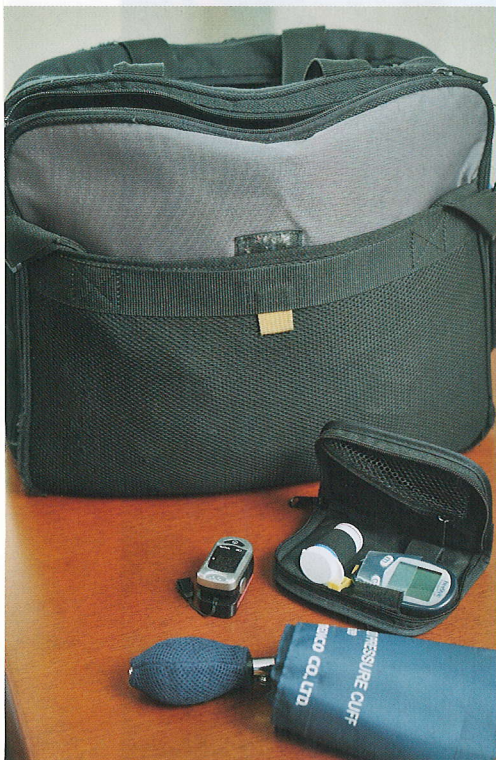


特集

胃腸と
ストレス

「ストレスと腸」のエキスパート 松枝啓さんの 赤ひげ往診日記

撮影／三村健二 文／小林（本誌）



診療に持参するかばんは大きくふくらんで重い。かばんはすぐにぼろぼろになり、1年ももたない。

東京の下町、東京スカイツリーにほど近い墨田区錦糸町。この街に、寝たきりや認知症、精神疾患などで通院がむずかしい人への訪問診療や看護、リハビリテーションを行なう在宅療養支援診療所〈さくらライフクリニック〉があります。このクリニックの院長は、消化器疾患の治療の世界的な権威と讃えられる松枝啓さん。旧・国立国際医療センター国府台病院院長を定年退職後、数々の名誉職の仕事を辞退し、「医療の原点に戻りたい」と願っての再就職。地域の赤ひげ先生として、今日も往診に出かけていきます。

赤ひげ先生の1日



往診前に看護師との打ち合わせ。「美人に撮ってあげてね」と松枝さん。気さくな人柄が、患者もスタッフも笑顔にする。

**家族として感じた後悔。
「こういう思いを
させてはいけない」**

松枝さんは長年、消化器治療の専門家として、病院や大学などで患者の治療および後進の育成にあり、病院長職を歴任。特に、ストレスが密接に関係して起こる過敏性腸症候群（10歳）の研究では海外からも評価され、その診断基準や治療方針を決める国際委員会「ローマⅢ」の委員を務めました。定年退職後は、いすにすわって押印するだけといった仕事の誘いもたくさんありましたが、断ったそうです。理由の一つに、1970年代にシカゴの大学病院に勤めたときの恩師、J・B・カースナ1教授の存在がありました。「彼は95歳まで現役で、1週間に7日働いていました。『休まずに働く。そうすると体のほうがついてくる』を実践するボスでした」と松枝さん。「院長職は事務仕事が多く、太りやすい体質のぼくは体の管理がたいへんでした。退職後は体を使う仕事がしたいと思いました」。

さらに「義母の在宅診療の経験と後悔が伏線にありました」と語ります。「担当医の対応に、家族として残念な思いがあり、後悔と反省が残りました。ぼくは、患者や家族にこういう思いをさせてはいけないと思ったのです」。そうして松枝さんが選択したのが、現在の訪問診療の仕事でした。

室内の生活から、 自然を感じられる毎日に

松枝さんの1日は、朝7時前に自宅を出るところから始まります。通勤時間は電車で1時間30分。9時から夕方まで往診に出かけ、クリニックに戻ってからは事務仕事をこなします。帰路につくのは20時以降ですが、帰宅後も休日も緊急の呼び出しがたびたびあります。患者の住まいは、クリニックがある墨田区、近隣の江東区・葛飾区・江戸川区、東京都に隣接する千葉県市川市など広範囲で、往診にはおもに車を使います。昼休みはなく、移動の合間にコンビニのお弁当ですませることも多いのだそうです。